＜講評＞

2020 年度の外国語コンテスト英語部門は、11 月 20 日（金）の午後 2 時半から、短大のローラ・リー・クサカ先生とマラヤ大学の山口登志子先生を審査員としてお迎えして開催されました。第 26 回目である今年度は、コロナウィルス感染症の対策として Zoom によるオンラインでの開催になりました。また、パワーポイントやスライドを使用せずにスピーチを披露するというのも昨年との大きな違いです。オンラインでの開催ということで参加人数の減少も懸念されていましたが、当日は国際コミュニケーション学部、経営学部、法学部、現代中国学部から 13 名の参加者が自作の英語スピーチを披露するというたいへん盛況なものになりました。また、視聴者数も多い時は 50 人を超え、オンラインならではの参加の容易さなど利点がありました。進行役は国際コミュニケーション学部の小林純歌さんと経営学部の清水実穂さんが務めてくれました。彼女たちのテンポの良いかけ合いにより会場が盛り上がり、スピーチ後の発表者への質問によってコンテストがより楽しめるものになりました。

審査員の先生方にはスピーチの内容、表現の正確さ、発音の流暢さ、プレゼンテーションのスキルを総合的に判断していただきました。今年度は写真や絵といった視覚資料がありませんでしたが、代わりに視聴者は発表者の表情や仕草に集中することができたと思います。

審査の結果、入賞者は以下の通りになりました。

1 位：中原 恵玲（Ellie Nakahara）（経営学部）
2 位：小原 和真（Kazuma Kohara）（法学部）
3 位：廣住 礼美（Ayami Hirosumi）（国際コミュニケーション学部）
オーディエンス賞：山内 智世（Tomoyo Yamauchi）（法学部）
オーディエンス賞：粕谷 海友（Miyu Kasuya）（国際コミュニケーション学部）

1 位の中原さん（経営）のスピーチは、日本でしばしば問題になる移民の不法滞在について移民の目線から考えるというものでした。彼らの多くが 3 年間しか働けず、低賃金で不衛生な場所での労働を余儀なくされています。移民を受け入れる環境を整えていくことが彼らの犯罪の抑止にも繋がるという、興味深く、また考えさせられる内容でした。スピーチでは高い英語力とオーディエンスへの問いかけ、明瞭な発音が高評価に繋がりました。2 位の小原さん（法学）はキャッシュレス化が進まない日本の現状について考察しました。キャンペーンによるキャッシュバックやレジの効率化、さらにはブラックマネーの流入を阻止できるなど、キャッシュレス決済には様々な利点があります。小原さんは日本でキャッシュレス化が進まない原因の一つとして日本の貨幣が偽造されにくいことを挙げ、自身がインドで偽札を渡されてしまった経験についても語ってくれました。ユーモアを混じえた発表

力の高さ、聞き取りやすい発音、着眼点の独自性などが高く評価されました。3位の廣住さん（国コミュ）は自身が受けたセクハラの体験から考えさせられたジェンダーの問題、男女の平等について言及しました。セクハラがしばしば女性の側に問題があるとされることに疑問を投げかけ、女性が時間帯や服装を気にせず外出できる社会作りの大切さを明瞭な発音で力説している姿が印象的でした。

昨年に引き続き、今年もオーディエンスによるスマホのアンケート投票による審査が行われました。今年は2人のオーディエンス賞受賞者が出ました。山内さん（法学）は外出が難しい今日楽しめるオンラインプログラムを紹介してくれました。子供たちや外国に住む日本人との交流、旅行などネットを通して広がった自身の体験について自然体のプレゼンテーションを披露してくれました。粕谷さん（国コミュ）は、新しいことに取り組む際の姿勢についてスピーチしてくれました。英語力やスポーツ、歌唱力を身につける時、共通して重要になるのは何度も練習すること、自分の能力を記録、録音して悪い箇所を改善していくという過程を繰り返すことです。スピーチの構成、表現力が素晴らしい発表でした。

入賞者以外のスピーチのテーマも、「愛知大学で学ぶ理由」や「パンデミックによって変わった考え方」など、今年度は個人的なエピソードや時事問題を取り扱ったスピーチが多く、とても興味深いものでした。どのスピーチも完成度が高く、審査員の先生方も入賞者を決定するのにたいへん悩まれていました。惜しくも今年は入賞できなかったみなさん、来年度ぜひ再挑戦してください。MCになってコンテストを盛り上げることもできます。オーディエンスだった学生さんもぜひ今度はスピーチをする側になってみてください。みなさんの来年度の参加をお待ちしています。

（リーア・ギルナー、石井麻璃絵）